

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第18号

2019年5月15日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



ごあいさつ

同窓会会長 梶原和歌

同窓会の皆さま元気にお過ごしでしょうか。会報18号をお届けする時期となりました。

3月、4月は別れと出会いの季節ですね。母校では平成30年度の卒業式・学位授与式が3月19日あいにくの雨でしたが県民文化ホールで盛大に挙行されました。看護学部生は82名、大学院看護学研究科修士課程16名、博士後期課程2名の方が新しい人生の旅立ちをされ、同窓会員数も2285名となりました。答辞を読まれた方、大学賞を受賞された学部生、院生すべて看護学部の方々でした。凜とした袴姿からもその活躍と努力が偲ばれに眩しさを感じました。特に5年一貫生博士課程共同災害看護学専攻(高知県立大学・兵庫県立大学・日本赤十字看護大学・千葉大学・東京医科歯科大学)の修了生を初めて輩出できたことは時機を得て今後の活躍が期待される所です。自然災害・戦争に巻き込まれておこる人的災害、高知だけでなく他地域、世界レベルで創造力を発揮していただきたいと思います。この開設からずっと携わってこられた特任教授の南裕子先生と中山洋子先生がこの3月退職され県外のご自宅へ帰られることを最近、伺い残念でなりません。

今年は年号が変わる一つの節目にあたります。母校は昭和27年日本で初めて4年制大学として黎明期の教育を一步步づつ整え、平成の時代に、高知県の大きな協力もあり量的、質的な改革と発展を遂げられて今日に至っております。式辞で学長があらためて図書館問題に言及謝罪され「挫折を恐れず、感性を信じて、人々と創造する生き方を選び取ってほしい」と述べられたときはご自分の体験からにじみでた言葉として受け取りました。看護学部の一卒業生としては「説明とお詫び」をあちこちで述べられる学長の苦難を想像し激励したい気持ちでいっぱいです。

4月4日には県民体育館で入学式が行われます。さくら舞う新しい年度初めに、私共も課題山積の社会情勢を視野に入れて平和な生活が成り立っていくように賢く生きていきたいものです。

主な内容

- ① 同窓会会長ごあいさつ
- ② 母校を去るにあたって想うこと
- ③ ようこそ先輩！
- ④ グローバルに活躍する卒業生・修了生
- ⑤ 全国で活躍する卒業生・修了生
- ⑥ 同窓会による学生・卒業生活動支援
- ⑦ 看護学部は今
- ⑧ 温故知新 その9



野嶋 佐由美 学長 ご挨拶

本同窓会初代同窓会長である南裕子先生が2019年3月末をもって母校を去られることになりました。初代高知県立大学学長として、さらに、学長任期終了後も教育・研究を通して高知県立大学の発展に大きく寄与されてこられました。日本の看護界のみならず世界の現状を先見し、探求し続ける姿は、同窓生にとって尊敬の念に堪えません。

今回は、「母校を去るにあたって想うこと」と題して南先生にメッセージを寄せていただきました。ご略歴の紹介とともにメッセージを掲載できることをうれしく思います。これからもなお、前に進み続けるであろう南先生のご活躍を同窓生として期待しております。



母校を去るにあたって想うこと

11期生 南 裕子

高知県立大学学長の任期を終えて、野嶋学長にバトンタッチしてから2年が経ちます。この間私は、看護学部棟2階の208の研究室において、主に博士課程「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(略してDNGL)」に教員としてまたプログラム責任者として 教育・研究に携わりながら、看護学研究科の修士課程や博士後期課程の院生に授業をしたり、学部の学生に特別講義をしたりと、まさに看護学教員・研究者として過ごしてきました。看護学教員として自分のキャリアを終えたいという私の強い願いを野嶋学長や当時の看護学部長の中野先生や看護学研究科長の藤田先生に叶えていただきました。それがどんなに幸せなことだったのかを研究室を退去する今になって改めて感じ、感謝の気持ちで一杯です。

母校の高知女子大学が高知県立大学に生まれ変わった8年前、私は理事長・学長となり、すばらしい学長室と応接室は与えられていましたが、とても研究室ではありませんでした。振りかえれば3大学で20年間、学長として執務しましたが、その間研究室を与えられていても学長としての仕事が多くて、研究室でじっくりと仕事することはできませんでした。その間、看護界とは継続して関係がありましたが、自分の大学の学生や若い先生方と近くお話できることは余りなく、また看護学系の専門書よりも大学管理に関係する他分野の書物を読むことが増えていたので、ちょっと寂しい思いはありました。しかし、今の研究室で本棚の本を眺めているだけで嬉しく、教壇にたつて授業をしたり、また学生たちが研究を進める傍でその成長を見つめたり、自分自身が看護学の先生方と研究費を得て共同研究ができるのはまさに看護教員のたいご味であり、知的興奮も覚えます。しかし、それももうすぐ終わります。母校の衛生看護学科を卒業して53年目、助手や助教授など何度か戻ってきては離れたのでこれが4度目の卒業です。



母校での最後の2年間は前述したように災害看護学のグローバルリーダーを5年一貫で、かつ5大学と共同で行うというまさに挑戦的プログラムでした。国公立の5大学(千葉大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学、兵庫県立大学と本学)は距離的にも離れているので、最新のテレビ会議システムを使って遠隔教育を行うのは、高齢の私にはちょっと大変でしたが、学生たちはすぐにマスターしてくれたので、何とかまるで一堂に会しているかのようなセミナーを行うことができました。技術の進歩が教育の可能性を広げていると思います。

私が災害看護学に関わり始めたのは1995年に発災した阪神淡路大震災からでした。昔から高知は台風銀座といわれていたので、台風への備えや対応は子供のときから身につけていましたが、看護学的にどう対応するかを知っている人は少なかったと思います。しかし、阪神淡路大震災の直後にかかわった高知出身の看護師たちは台風での経験を生かした対応をかなりできていたように思います。

特に思い出すのは野崎香野先生(2期生で当時神戸大学教授)のご活躍でした。手が火傷のように真っ赤になるまでおにぎりを沢山握って、病院や大学に届けられた逸話は忘れられません。私はたまたま明石の大学にいてかつ、日本看護協会副会長であり甚大な被害を受けていた兵庫県看護協会の肩代わりとして現地対策本部長の役を担い、全国の看護職の延べ3,000人の現地への調整を行う体制を整えました。それから24年、その後さまざまな自然災害および人為的な災害、そして複合的災害がわが国で発災し、現地に看護職が出かけて支援するさまざまなシステムができてきています。

私が本学の学長に就任する直前に東日本大震災が発災し、引継ぎを受けていた学長室で私は呆然としながらテレビのニュースを見ていました。本学の山田覚教授は日本災害看護学会の理事長でしたので、ただちにエキスパートの看護職を派遣してサポートする体制を整えられました。本学の中山洋子先生は当時、福島県立医科大学の初代学部長でしたので、管理職としても看護職としても原発の被災地の方々に寄添いながら、8年後の今にいたるまでかわり続けていらっしゃいます。熊本地震のときは、熊本大学に本学の卒業生が教授で苦勞されてましたし、災害ごとに看護学部の卒業生が活躍されてきました。昨年の7月の豪雨では、神原咲子教授のご実家が岡山の被災地にあり、直ちに活動をはじめてご苦勞されながら画期的な体制を次々と整えられています。宇和島の被災地へはDNGLの学生たちが中山教授の指導のもと、支援の形を変えながらもいままで続けてきています。私たち看護職は地道な支援活動の積み重ねをしてきました。それでも南海トラフが発災したら看護職は有効かつ適切な支援ができるのか、その準備が整っているのかと考えると、私は大丈夫とはとても言えない状況であると考えています。

一方で、本学の学生は学部横断型の防災・減災活動を地域において活発に行っています。看護学部の学生も大勢参加していて、その活動経験者がDNGLにこれまで2人入学しています。宇和島の支援では、大学院の学生が専攻横断型で経験を重ねています。学部生や大学院生の活動を見聞きすると頼もしいなと思います。これからはこの若い人たちに任せておけば良いのだとも思います。そう思いながらも、かならず未来の災害に十分に備えているだろうかと自分自身を振りかえり、かつ災害看護学を広め、深めることにかかわった身としては、焦燥感のようなものを覚えます。南海トラフがくるとわかっているけど、日常生活は多忙であり、いつくるかわからない災害に向けて備えることは易いことではありません。「災害は忘れたころにやってくる」時代ではなく、確実に災害は身近で発災する時代であり、これから半世紀は看護のどんな分野も災害への対応を考えないわけにはいかない時代であるのです。私は今、76歳、もし発災後生き残ったらどう生きるかを今から考えておかななくてはと思っています。同時に、研究者には定年がありません。正規の肩書はなくても探求し続ける楽しみがあります。災害看護学がこれからどのように社会にお役にたつのか、若い人たちが行う研究や活動の刺激体になれたらと願っています。



南 裕子 先生 ご紹介

学歴

高知女子大学家政学部衛生看護学科卒業
イスラエル国ヘブライ大学ハサダ医学部社会医療学科
修士課程修了
アメリカ合衆国カリフォルニア大学サンフランシスコ校
看護学部博士課程修了

職歴

横浜市民病院看護婦(1965)
高知女子大学家政学部衛生看護学科助手(1970)講師(1973)助教授(1974)
聖路加看護大学看護学部教授(1982)
兵庫県立看護大学学長(1993)
兵庫県立大学副学長・教授(2004)
近大姫路大学学長(2008)

高知県立大学学長(2011-2017)
高知県立大学大学院特任教授(2017-)

主な社会的貢献など

(社)日本看護協会会長
国際看護師協会会長
日本災害看護学会理事長、副理事長
日本看護科学学会理事、理事長、監事
世界看護科学学会理事長

受賞歴・称号等

第43回フローレンス・ナイチンゲール記章(2011)
など多数

ようこそ先輩！

渡辺 雅代さん(16期生)

私たち看護学科16回生の指導教官、山崎智子先生の米寿のお祝いを昨年行いました。その時のご報告をいたします。世話役数名で県内外に在住する同窓生に連絡を取り、21名中16名の参加を得ることができました。

当日まで、台風直撃かとひやひやさせられましたが、私たちのパワーに恐れをなしたのか打って変わっての上天気。予定通り開催する運びとなりました。

智子先生が、例の穏やかな口調で「皆さんお元気？」と入ってこられた時には、驚きました。お迎えに行きはしましたが自分で歩いてこられたとのこと。毎日の積み重ねの結果だと思います。

クラス会が始まりました。花束贈呈の後、ハッピーバースディを歌い、先生が勢よくローソクの灯を消し、ご挨拶や乾杯の後、会食が始まりました。近況報告では、現在の仕事のこと、自分自身の闘病、家族の介護、大切な人との別れなど経験しながら、それぞれの場所で今を大切に前向きに過ごされていることが伝わってきて大いに刺激され励まされました。

又、多彩な趣味も紹介され、野菜作りや、草花園芸、詩舞、日本舞踊、楽器演奏、ゴルフ、ゲートボールなど楽しんでいる様子もわかり知ることができ、着物に着かえての日本舞踊やオカリナ演奏の披露もあり、皆で「学生時代」を熱唱しました。帰りにはお花の球根までいただき、今その芽が春を待っています。

思い起こせばおよそ半世紀前、ギンギンと軋む階段を上がり、看護学科の教室で専門分野の講義を受けたのがこの前のことのように思い出されます。病院実習、教育実習、保健婦実習、卒業論文等々。進んだ道はそれぞれが違っていました。その時の何かが確実に今につながっているように思うのです。それを思い起こさせてくれるようなクラス会になりました。



16期生 山崎智子先生の米寿のお祝い

智子先生、これからもどうぞお元気で。また、お会いできることを楽しみにしています。

野中 邦子さん(24期生・修士1期生)

今は昔、学生時代に精神科看護を希望し民間病院へ。訪問看護に関心を持ち、点数化されていない時代から、勤務先の理解のもと多くの患者さん宅へ伺いました。また外来看護ではMSWや臨床心理士と共に働き、看護の視点で家族支援も。40代で母校の大学院に入学、若く柔軟な同期生の中、錆びついた頭でもがきました。精神科看護の現場へ戻り、院内教育そして看護管理の役割へ。小さな医療機関では看護部の人事管理や教育の他、病院全体の医療安全・法令順守など多岐に渡って求められ、それはもう悪戦苦闘、職員の協力あってこそです。定年も過ぎ後輩にバトンタッチ、時間かまわず携帯電話が鳴ることもなくホッ。もう働くことはないと思っていましたが、めぐり合わせで県立大の健康管理センターへ、早や2年半が過ぎました。永国寺キャンパスで文化学部の学生さん約600人、その健康診断や個別相談を担当、学生さんに心を向ける毎日です。明るい顔で、寂しそうな顔で、学生さんの来所理由は様々。体調管理はもとより、青年期の悩みや不安、経済的な厳しさと疲弊、発達上の特性と困難さ等々。継続して来る方、一度つきりの方、そして自分一人で踏ん張ってるであろう方、各々の学生さんにどう寄り添えるのかと私も悩みつつ健康管理センターに詰めています。皆さま、機会があれば、どうぞ覗いてお声掛け下さい。



現在の永国寺キャンパス



グローバルに活躍する卒業生・修了生

渡部友梨さん(61期生) JICA青年海外協力隊 看護師

私は大学卒業後に、東京で3年間看護師をしていました。現在はJICA海外協力隊として昨年の7月より東南アジアにある東ティモールという国で公衆衛生活動を行なっています。具体的にはクリニックでの5S活動、結核病棟のシステム構築、結核が蔓延する村への巡回健診、家族計画に関する教育指導、またHIVの感染予防を目的とした健康指導などに取り組んでいます。開発途上国での活動は想像以上に困難です。私が日本で学び身につけた知識や経験を活かすことは、現地の人々にとって大きな力になるのは確かです。しかし、彼らも学んできた看護などの知識や経験があると同時にプライドもあります。そこに突然現れた日本人が介入しても素直に受け入れるスタッフは、当たり前のことなのですが、とても数少ない状況です。そのような状況の中、どのようにアプローチしていくべきかはほとんどの協力隊が頭を抱える悩みでもあります。

さて昨年12月、待ちに待った一時帰国の際に高知に行ってきました。美味しい土佐料理を食べながら大学時代にお世話になった先生と同期と共にそれぞれの近況をはじめ、活動する現地でのおもしろい土産話から医療の現状・課題など真剣な話までたくさん話しました。とても楽しかったです。話を通して、助産師として新たな場所で奮闘する同期からは母子看護を学び、先生からは活動先で活用できる看護理論や看護研究について学ぶことができました。途上国でのうまくいかない生活や活動のストレス発散だけでなく、次に繋がるアドバイスまで頂き、有意義な時間が過ごせて感謝しています。先生や同期が今取り組んでいることや頑張っている話を聞いて、環境や壁は違えど、同じ看護の道を一生懸命歩んでいる同士がいるのだと、とても心強く誇りに思い、自分自身を鼓舞する良い機会となりました。

活動は残り約1年半です。現地の人々が健康に生きるための媒体として役立てるように努力し、かつ、今まで経験したことのない課題に取り組むことで、苦難を乗り越えながら自分自身の成長を楽しみ、身に付けたものを帰国後に還元できるよう頑張ります。また帰国するとき高知に行きます。そしてたくさん話しましょう。



結核病棟でのバイタルサイン測定の様子



帰国・帰高時の同窓会の様子

福岡 雅津子さん (修士12期生) 滋賀県立精神医療センター 精神看護専門看護師

高知女子大学大学院看護学研究科12期生です。早いもので、大学院を卒業して10年がたとうとしています。休職し、家族全員で関西から引っ越して過ごした高知での日々。小学校1年生と4年生だった子どもも大きくなり、上の子は今年成人式を迎えます。たくさん学び、たくさん遊んだ高知での2年間。一生おつきあいで友人を得、仕事で迷った時も自分で考え乗り越えていく術を学ぶことができました。

私は今、教育や外来看護相談をしています。外来看護相談では、摂食障害を持つ患者さんとご家族の相談を中心に実施させていただいています。精神科では、薬物療法と並び心理社会的治療は大切な治療の柱です。肥満恐怖と闘いながら食事が治療の中心となる摂食障害の治療において、看護師が面接を通して関与できることはたくさんあります。数か月から数年という経過と一緒に随伴させていただく中で、中学生や高校生だった患者さんが元気になり、もともと持っておられた力を発揮できるようになっていく姿に、私自身も元気をもらっています。この相談においては、大学院の研究テーマが私を支えてくれています。卒業後も実践の場で活用できることを研究のテーマに選定し、実施してきたケアを整理し、大切にしたい看護観や姿勢を追及する手助けをしていただいた先生方に本当に感謝しています。院生時代、あまり研究が好きではなかった私ですが、今やっている実践を研究という方法で突き詰めたいと思う今日この頃です。



中尾 瑞香さん (修士14期生) 十市小学校 養護教諭



養護教諭として6年目を迎えた頃、職務に関して多くの課題を抱え、自分自身が養護教諭としてさらに研鑽を積まないといけないと思うようになりました。ちょうどその頃、地域保健学領域で養護教諭も働きながら学べると知り、自身の再教育のつもりで修士課程に挑戦しました。

修士論文では不登校の子どものご家族にインタビューをさせていただきました。その時に頂いた一つ一つの言葉は身につまされる思いがし、学校ってなんだろう？義務教育ってなんだろう？そういったことから、自分自身の観念を再考していった期間でした。今でも時々思い出しては、今の自分は子どもやご家族に寄り添っているだろうかかと振り返っています。

修士を出る前と後で、課題が減ったかと言えば、それはありません。しかし、課題に対して立ち向かえるペースは自分の中にできたと思います。また、応援して下さる県立大の先生方と、修士課程で出逢った仲間を支えられ、昔の自分よりも一歩前に進むことができたと思っています。学校現場では、生活習慣が確立している子どもとそうでない子どもの二極化や、ネットやメディアへの依存などにより学習への影響を及ぼす新たな課題もあります。目の前の子ども達やご家族が抱える課題に寄り添いともに悩みながらも、一緒に前に進んで行けるようこれからも支えていきたいと思っています。

グローバルに活躍できるリーダーを目指して

共同災害看護学専攻 博士課程 西川愛海さん

私は、博士課程教育リーディングプログラム「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(DNGL)」の一期生として平成26年4月に高知県立大学大学院に入学し、平成31年3月に卒業します。

振り返りますと、この5年間は勉学に専念できた非常に充実した時間でした。DNGLは兵庫県立大学・東京医科歯科大学・千葉大学・日本赤十字看護大学との共同大学のため、授業や演習はTV会議システムを使用します。今ではすっかり慣れた共同大学の体制や最新のシステムに戸惑いを感じていた日々が昨日のこのように思い出されます。

私たちは「日本ならびに世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決できる高度な実践能力かつ研究能力を兼ね備え、国際的・学際的指導力を発揮するグローバルリーダー」となることを目標としています。

そのため、災害看護の知識や技術の習得だけではなく、国際・学際・産官学連携力の向上が求められます。在学中は、フィリピンやインドネシアで国際連携の下フィールドリサーチを行い、中国・台湾・ドイツ・インド・アメリカなどに学会や研修にて訪れ異文化を学びました。また、東北大学や名古屋大学など他のリーディングプログラムを中心に積極的な学際交流を行い、その中で改めて災害看護学・看護学を問いました。さらに、私が研究テーマとしている南海トラフ地震の減災に向けて高知県内の行政や関係組織、住民と共に協働して参りました。このような経験はDNGLだからこそ積むことができたものであり、修了後も、国内外問わない減災への寄与を目指しながら、災害看護学の発展に少しでも貢献できるよう研鑽します。

博士論文は、『南海トラフ地震が予測されている地域住民の「減災コミットメント」が減災行動に及ぼす影響』というテーマで取り組み、南裕子先生をはじめとするDNGL5大学の先生方のご指導のおかげで無事に完成に至りました。この博士論文を基盤とし、今後も研究を続け、地域に還元して行きたいです。

春からは、愛知県の日本赤十字豊田看護大学の教員として、教育や研究に携わらせていただきます。DNGLで培った経験や、沢山のご指導を糧に、さらなる前進を目指します。最後になりますが、これからもDNGLの応援やご指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。



主指導教員の南裕子先生と

5大学の修講式

全国で活躍する卒業生・修了生

「看護師として働いて」

日本赤十字社 神戸赤十字病院
齋尾 康次さん(64期生)

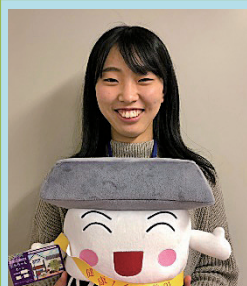


私は現在消化器内科で働いています。患者さんはガンを抱えている方が多いです。ガンを抱えている患者さんを受け持つことも多く、身体的面を観察することはもちろん大切なことではありますが、精神面を援助していくこともっと大切だと日々感じています。患者さんはいつ病態が悪化するかも分からない恐怖、転移しているかもしれない恐怖などと毎日闘っていると感じます。患者さんが不安を表出することがあった時、その不安に対し毎回この患者さんにはどう対応したらよいか悩みます。患者さんそれぞれに対し個性があり、全患者さんに対し同じような関わりをすると患者さんを不快にさせてしまうことがあると働き始めて経験しました。学生時代に学んだ個別性をしっかりと考え患者さんと向き合っていくことが大切であると日々感じています。

今では、十分ではないですが患者さんのキャラクターなどを捉え、個別性を考え患者さんと向き合い、患者さんの笑顔を見れることをやりがいに感じ日々仕事をしています。

「保健師として働いて」

倉敷市役所児島保健福祉センター児島保健推進室
花井 優実さん(64期生)



保健師として、働き始めて、約1年が経ちました。少しずつ「花井さん」と声をかけられることが増え地域の方に顔と名前を覚えてもらえることに喜びを感じています。

しかし、まだまだ個別の対応や地域の事業に出ていくなかで、戸惑うことや悩むことは多く、未熟だと感じる部分が多くあります。保健師

として地域の方にどう接し、働きかけたら良いか、支援とは何かということを経験し、周りの先輩方に相談しながら過ごす毎日です。その中で、学生の頃に学んだことが、地域に出ていくことで少しずつ把握でき、事業の目的や意味などがつながるようになってきました。また、個別ケースの支援を通じ、関係機関とも連絡を取り合う機会が増え、日常のコミュニケーションや信頼関係のうえに、継続的な関わりや協力があるのだと改めて感じています。

保健師として悩むことも多いですが、保健師としての責任と誇りを持ち、住みやすい地域づくりができるよう、今後も地域の方々と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

「助産師として働いて」

倉敷成人病センター 岡崎 都佳さん(64期生)

助産師として働きだして1年が経とうとしています。私は年間1500件程お産のある病院で勤務しており、入職してから褥室・新生児エリアで、1月からは分娩エリアへ異動しました。今もなお、新しいことの連続で緊張と失敗ばかりですが、日々頑張っています。辛いことがあると思いつきのまは、学生



のときの實習です。しんどいこともあったけれど、それ以上に得ることの方が多かったです。同じ志を持った仲間と過ごした日々は、今わたしの大切な心の支えになっています。

そして、何時間も痛みに耐える産婦さん、ウトウトしながらも産婦さんをサポートする家族、生まれたときの笑顔と涙、そんな瞬間を共有でき助産師になって良かったなと感じます。まだまだ色々なことを学びながら成長している途中ですが、1件1件のお産を大切にしていきたいと思っています。今後も安全にそして家族として次に繋がるお産になるように、看護の心を大切にしていきたいと思っています。

「養護教諭として働いて」

宿毛市立松田川小学校 古井 棕子さん(64期生)

私は、宿毛市の小学校で養護教諭として働いています。4月当初は、初めてのことで戸惑うこともありましたが、職場の方々に助けていただきながら、あっという間に1年が過ぎようとしています。明るく素直な子どもたちに囲まれて、充実した日々を過ごしています。



子どもたちとの関わりの中で、生活面に課題のある児童や特性があり支援を必要とする児童と関わる機会が多かったです。そういった子どもたちが様々な思いを抱えながら学校生活を送っていることを感じながらも、うまく支援できずに悩むこともありました。そうした時には、大学で学んだことを振り返るようにしています。大学での学びが、養護教諭としての専門性を求められる場面でも自分自身のよりどころとなっていると思います。

まだまだ実力不足を感じることもありますが、子どもたちに寄り添える養護教諭を目指して頑張っていきたいです。

同窓会による学生・卒業生活動支援

同窓会では、卒業生の相互交流や学生の様々な活動を支援することを目的に活動しています。平成29年度は、在学生の国際交流活動を支援しました。

ガジャマダ大学医学部看護学科と本学科は2017年3月にMOUが締結され、それ以降、学生および教員の交流が行われています。今回も、両大学間の国際交流と、異文化での生活体験を通じた国際感覚・理解を深めるために、7泊9日(2018年3月22-30日)の研修を行いました。参加した学生は、2回生が2名、1回生が4名であり、教員2名が引率しました。

スケジュール

- 3/22 高知出発ージョグジャカルタ到着
- 3/23 外来・入院機能をもつ郡レベルの地域保健センター見学
メラピ火山災害後の再建コミュニティ見学
- 3/24 ボルブドゥール寺院(世界遺産)・メラピ博物館の見学
火山噴火跡周遊ツアー参加
- 3/25 プランバナン寺院(世界遺産)の見学・市内散策
- 3/26 ガジャマダ大学 学科長および教員紹介
共同研究に関する話し合い(教員)／学内ツアー(学生)
教育病院見学
- 3/27 ゲストレクチャ:本学教員による研究紹介、及び、
学生による大学紹介
市内散策(クラトン王宮他)
- 3/28 村レベルの地域保健センターの活動見学
ボランティアと助産師による乳幼児健診の見学
- 3/29-30 Wrap up meeting ジョグジャカルタ出発ー高知到着



3次医療を提供している教育病院(産科病棟)では、異常分娩への早期対応や母乳育児確立に向けた取り組みが行われてきました。また、大学で作成した健康教育の教材なども積極的に活用されていました。



ゲストスピーカーに参加して下さったガジャマダ大学看護学科3回生と

学生間の交流を通して、「普段は、自分が思ったことを言葉にして相手に伝え、わからないことがあったら自ら聞く、という当たり前のことを恥ずかしく感じてしまうことが多いが、インドネシアの学生さんの姿を見習って、主体的に人に関わっていきたい」「うまく話せないから諦めるのではなく、どうしたら相手に伝わるかを考え、伝える努力をすることが大事だと感じた。失敗を恐れずに‘挑戦する姿勢’を持ちたい」など、参加した学生は様々なことを感じ、学んでいました。研修期間中は、ガジャマダ大学の先生方や学生さんから、心温まるきめ細やかな対応をしていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

(文責:母性助産看護学 渡邊聡子)



乳幼児健診の向上を目指し、民家を借りて助産師とボランティアの女性が乳幼児健診を行っているところを見学しました。



学生6名力を合わせて、高知県立大学看護学部の紹介を英語でプレゼンテーションしました。

エルムズカレッジ大学院短期研究のご報告

高知県立大学大学院生(看護学研究科・人間生活学研究科)を対象とした、協定校のエルムズカレッジでの第1回短期研修プログラムを実施しました。

看護学研究科から4名の院生と教員1名、人間生活学研究科から1名の院生が研修に参加し、両研究科の引率教員とともに、8月11日から8月20日までアメリカ・マサチューセッツ州のエルムズカレッジで研修を行いました。

研修のテーマは、アメリカの医療・福祉現場の「多様性」(Diversity)と「職種間連携」(Interprofessional Work)を理解することです。そのために、午前中は英語の授業があり、自分の意思を英語で表現する方法や、移民社会アメリカの歴史や社会、価値観等を学びました。また、午後は、エルムズ大学の看護学・社会福祉学の各学科の教員のご支援により、看護師やソーシャルワーカーが働く、地域の医療現場や福祉施設への訪問を行いました。

訪問先は、急性期病院の救急救命室、地域のシニアセンター、女性受刑者の更生施設、ヒスパニック系住民のための主にメンタルヘルスに係る家族支援センターや児童・若年者の入所施設、DVや性暴力(虐待)被害者のためのシェルター等でした。各々の場所で、看護師やソーシャルワーカー等が、専門職の役割や患者・利用者の抱える課題等を説明し、本学の院生の率直な質問にもひとつひとつ丁寧に対応してくれました。

さらにエルムズカレッジの学内では、大学が運営する、貧困地域を巡回して食事を提供し、医療・福祉ニーズに対応する車、ケア・バンや、看護学研究科の授業や薬物の授業への参加、看護実習の体験、看護研究のポスターセッション等の経験をすることもできました。

このように1週間という短期間のプログラムですが、その内容は大変充実しており、すべてにおいてサポートして下さったエルムズ大学の教職員、また、見学等を快く引き受けて下さった施設担当者や専門職の方々、チューターとして院生と交流を深めてくれたエルムズ大学の学生など、彼らのホスピタリティ精神に多大なる感銘を受けたことはこのプログラムの最大の収穫であったかもしれません。ご支援いただいた同窓会にも心より感謝申し上げます。



Bay State Medical Centerの救急救命室のスタッフとの見学前意見交換の風景。救急救命室で協働している管理者、看護師、教育担当者、カウンセラー、ソーシャルワーカーなどが参加して、ここでの役割などについて語ってくれました。その中で語られた、この救急病棟での課題は、日本とアメリカの医療制度などの違いを肌で感じることでできる内容でした。

博士課程のナースプラクティショナー対象(DNP)の腹痛に焦点をあてたフィジカルアセスメントのクラスに参加させてもらった時の様子。DNPの学生たちは、午前中、講義で「Assessment and Differential Diagnosis of Abdominal Pain」教科書を用いて子どもから高齢者までの腹部アセスメントを網羅できる知識の強化や確認を行った後、ペーパーペイシエント数例を読んで、それぞれにアセスメント、プランを記入して提出し、その後実際のアセスメントの実技訓練を行うそうです。

(文責:看護学部 畦地博子)



看護学部は今

～先輩方、今在学生はこんなサークル活動をしています～

太鼓部

山下 未菜美さん

私たち太鼓部は、太鼓演奏を通して皆さんに元気を届けようと、日々活動しています。日々の活動は楽しく、でも本番に向けてはお互いに助言しあって高めあいながら、聴いてくださる方の心に響く演奏を目指しています。先輩方から受け継いだ口伝を大切にしつつ、今の自分たちにできる最高の演奏が出来るように工夫しながら活動してきました。学内外問わず、多くの場で演奏する機会をいただいております。それぞれの場が自分たちにとっても成長の場となっていると感じます。太鼓部での活動を通して、舞台上立つ心構えや姿勢などを学ぶことが出来ました。さらに先輩方や後輩たちも含めた、たくさんの仲間に出会うことも出来ました。太鼓演奏を通して、お声がけして下さる地域の方もおられます。「いい演奏だったよ」「ありがとう、また来年も来てね」などの言葉が、私たちの活動の糧となっています。これからも元気を届ける音を響かせられるよう、精一杯活動していきます。



野球部

東 康平さん

私たち準硬式野球部は部員とマネージャー合わせて22人で活動しています。普段は大学の前のグラウンドで練習をしています。あまり大きいグラウンドではないので、打撃練習はあまり出来ませんが、守備練習やティー打撃など限られた環境の中で出来ることを仲間と励まし合いながら練習しています。チームの目標は、1部リーグに上がり、四国で1位になる事です。部員の中には大学から野球を始めた初心者もありますが、部員の中で教え合い、何より楽しみながら野球をしています。他の大学に比べてマネージャーが多いのが特徴です。部員とマネージャーがとても仲が良く、練習でも試合でもマネージャーの存在が私たち部員にとって大切なものとなっています。試合では、ピンチの時でも声掛けを忘れず盛り上がり、全員で勝ちにいています。また、紅葉祭では毎年焼きそばを販売し、大学行事を盛り上げる取り組みもしています。



フットサル部

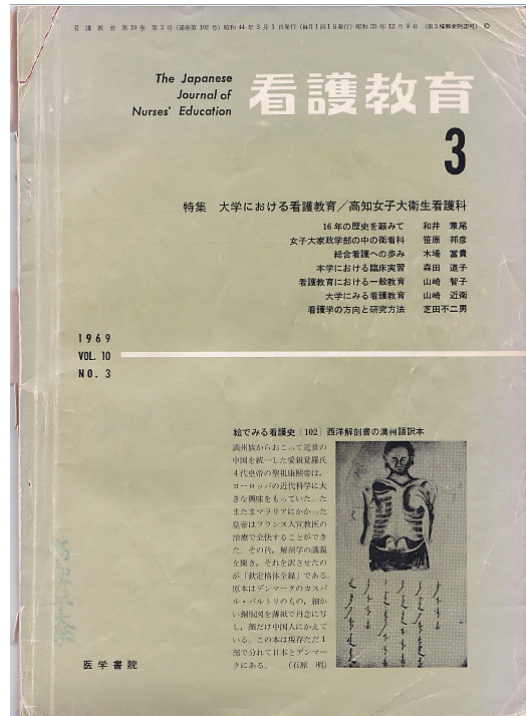
中谷百恵さん

看護学部2回生中谷百恵です。私はフットサル部FC.SOPHIAに所属しており週3回の練習と土日の試合に参加しています。所属している部員には、経験者はもちろん大学からフットサルを始めたという選手も多くいます。私も大学からフットサルを始めた初心者の中の一人です。経験者もそうでない人もみんなで楽しく行っています。練習に行くことができていたため、初心者でもリーグ戦や大会に出場することができ、仲間とともに日々高めあっています。長期休みには、合宿や季節に合ったイベントを開催しており、学年を超えて仲良しです。また、月に1回程度、障害を持った子どもたちと一緒にフットサルを行うフットサル教室を行っており、社会福祉の活動にも力を入れています。テスト期間などには、練習に行く回数を調整し、勉強に打ち込める環境を作っています。そうすることによって、学業を疎かにすることなく良い成績を残すこともできています。

FC.SOPHIAは、フットサルと勉強を両立することができる部活で大学生活は充実感があります。



温故知新 その9



今回も、昭和44年(1969年)に医学書院から発行された“看護教育第10巻3号”を紹介します。

高知女子大衛生看護学科での教育について語られる中で、山崎近衛先生は、「戦前派の看護婦」であるご自身の体験と、1969年当時の看護学生の比較をされています。ここでは山崎先生の従軍看護婦としての印象深い体験についての語りを紹介します。

「(昭和12年上海)忘れられないのは、コレラの重症病棟に決死の思いで勤務に就いたことである。銃声が轟き、弾は音を立てて病室の壁に突き当る。弾の休み間に病室から病室へと回る。病室には、この世の地獄を思わすような恐ろしい、コレラ顔貌をした脱水しきった患者が、目だけ光らせてはい回っていた。苦しさに白衣の裾でもつかまえたら絶対離さない。水欲しさに空になったやかんをくわえ、一滴のしずくまでもと、すごい形相でにらんでいる。かわいそうで耐えられなく、少量の水でも与えたなら、飲んだ水の数倍とも思われる水様吐物がまるですごい噴水のように飛び出してくる。慰める言葉も、励ます言葉ものどにつまって出てこない。もうここではそらぞらしいものでしかなく、黙って便と吐物の世話、注射だけがぎりぎりの所で、せめて一人で死ぬ寂しさを味わわせないように、つききりでいられないままに、一刻も休む間もなく病室から病室へ回ったものである。マスクは流し放しの涙ですぐぐっしょり濡れていた。勤務は、くじで決めて二週間ずつとなっていたが、私たちの勤務中、患者は次つぎとなくなって、交代はなかったように思う」

「(昭和19年満州)病院全体からの重症患者を集めた特別病棟で、前線からの重症患者、院内で重症になった患者が私たちの病棟に集まってきた。ここでは内地還送のできない、ただ死を待つような患者ばかりで、この世の最後の数日ないし数週間を過ごすところになっていた。(中略)ある時、重症のいわゆる戦争栄養失調症で入院していた患者に、お寿司を作って、小さいおにぎりにして持って行った。じっと眺めていたが、痩せ細った指につまみ、口まで持っていったがどうしても口に入らない。『どうしたの』と聞くと、喉の奥をならして涙を飲み込んでから、『自分は東京のすし屋の息子です。嬉しくて不覚の涙を流しました』と、冗談ともなく言われた言葉が胸に突き刺さる思いがして、涙がこぼれるのをこらえて、『ここまでこられたんだから、しばらくここで療養すれば、若い身体の回復は早いし、少し元気になれば内地還送してもらいましょうね』と言うと、頷いて微かに笑顔を見せた。余命幾ばくもない患者が、これほどまでに故国を、肉親を慕いつつ、死んでいかなければならないとき、これ以上の悲しみがあるだろうか。命に限りがあるとすれば、それはどうすることもできないにしても、せめて残る数日、数時間を苦しませないように、悲しませないように祈る気持ちで、ただその患者の小さな喜びと幸せのためのみ続けた看護であった。」「こうした看護体験を、ただ自分の思いでとどめるだけでなく教育の中にどう反映していくかを考えながらの毎日である。」

教科書やその他の古い看護の文献、あるいは看護の雑誌等をお持ちの方で、寄贈してもいいとおっしゃる方がいらっしゃったら、是非下記までご連絡・ご送付【連絡後、送料受け取り人払い】下さいますようお願い申し上げます。

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部同窓会 088-847-8718 (担当:川上理子)

ご寄付をいただいた方

松井 郁子様(5期) 梶原 宣子様(9期) 佐々木 正子様(5期)
南 裕子様(11期) 山田 薫様(26期) 津島 ひろ江様(14期)

左記の皆様より寄付をいただきました。
誠にありがとうございました。
(敬称略 平成31年3月6日現在)

平成30年度 高知県立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程の院生の修士論文発表会



平成30年度 高知県立大学看護学部 学生の看護研究発表会



平成31年3月3日、看護学研究科博士前期課程の学位論文発表会、共同災害看護学専攻の院生の論文発表会が開催されました。
平成31年3月5日には、看護学部4回生の看護研究発表会が開催されました。
それぞれの領域において、看護研究で探求してきた成果を発表されました。

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

本号では、高知県立大学前学長、初代同窓会会長である南 裕子先生からメッセージをいただき、掲載することができました。
南先生には、お忙しい中、同窓会のために貴重な時間を割いていただき、感謝しております。
16期生の先輩方の同窓会の様子、さらに、全国で、またグローバルに活躍している同窓生からもメッセージを寄せていただきました。
今後も、同窓生からのメッセージや声をたくさん発信できますよう、活動してまいります。
表紙写真：仁淀川町の花桃と仁淀川

(池添・川本・西内)

編集後記

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部
Fax: 088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>